

セクシュアリティと日本語表現との関連モデルについての検討

— 性的マイノリティを中心として —

○ 薛小凡¹・青野篤子²

(¹ 福山大学大学院人間科学研究科・² 福山大学)

問題

言語は社会的に構築される。たとえば、日本語には、ていねいさ(politeness)や口語表現におけるジェンダー差が顕著である(薛, 2016)。また、言語表現そのものが個人のアイデンティティやジェンダー観を形成する(Crawford, 2001)。本研究は、性的マイノリティ当事者の協力を得て、半構造化インタビューを行い、当事者のライフストーリーをもとに、セクシュアリティ、ジェンダー観と日本語表現の関連についてモデルを図1のように想定し、インタビュー内容の質的分析により検討する。

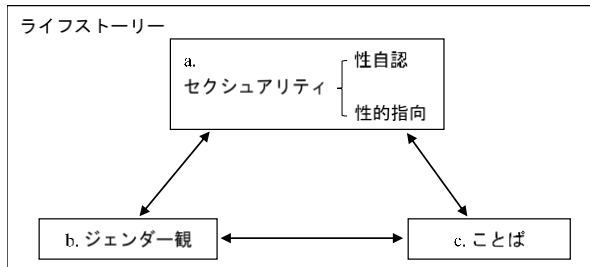


図1 セクシュアリティ及びジェンダー観とことばの関連仮説モデル

方法

参加者 Aさん：性自認は男性、性的指向はゲイ。40代前半、両親との3人暮らし、大学卒業後コンビニなどのアルバイトを経て、現在工場で働いている（非正規）。

手続き 参加者の同意のもとで1時間半程度の半構造化インタビューを3回行った。本人の希望により録音はせず、研究者ができるだけ忠実に聞き取った内容を記録した。

結果と考察

セクシュアリティ(a)、ジェンダー観(b)、ことば(c)の関係

Aさんは幼児期から男性を自認していた(a)。Aさんが考える男らしさとは、「運動が得意な人」（幼児期）、「筋力があり、精神的に強い人」（中学生の頃）(b)であり、自身は運動が苦手だったため、中学生の頃から自分は男らしくない(a)と感じていた。そのため、実際の性自認は中性に近い男性であった(a)ということができる。また、中学3年生より、好きになった相手は同性で、高校生の頃、セクシュアリティに関することばと出会ったこと(a)をきっかけに、性的指向をゲイ(a)と確認した。さらに、現在、求めるパートナーは男らしい

男性で、自分が女性役割をしたい(a)と語った。

児童期から現在にわたり、運動が苦手で女性的な趣味をもっていること(b)などから、自分は男らしくない(a)と感じ、人とかかわりを避けてきた。

幼児期に、父親や周りの男性が荒っぽいことばを使用しているのを怖いと感じたこと(b)から、それに対する抵抗感が強い。また、性自認が男性(a)のため、自称詞は「ぼく」を用いる(c)が、「ご飯(はん)を食(た)べる」(c)のように比較的に穏やかな中性的な男女とも使用できる表現(c)を選び、使用する。

声変わりした後の声はやや高いほうである。Aさんは、高校生の頃、クラスの男の子に「オカマ」や「男らしくない」と言われた(b)経験がある。自分でははっきり意識していなかったが、それから高い声を出さないようにしていた(c)そうだ。

Aさんは、「ぼく」(c)のような男性的というより中性的なことばや「ご飯(はん)を食(た)べる」(c)のような男女とも使えることば(c)の使用を通して、中性に近い男性の性自認(a)を有しており、世の中のジェンダー観に抵抗する一方で、女性と男性に関するステレオタイプが強く、男は仕事、女は家庭という性別分業を支持するなど、伝統的ジェンダー観を強調した。

インタビュー内容の分析により、仮説モデルを図2のように修正した。①ジェンダー観によりセクシュアリティを理解する。②ジェンダー観にもとづき、個人のセクシュアリティに相応しいことばを選択する。③ことばを通してセクシュアリティを再確認する。④ことばを通してジェンダー観を強化する。

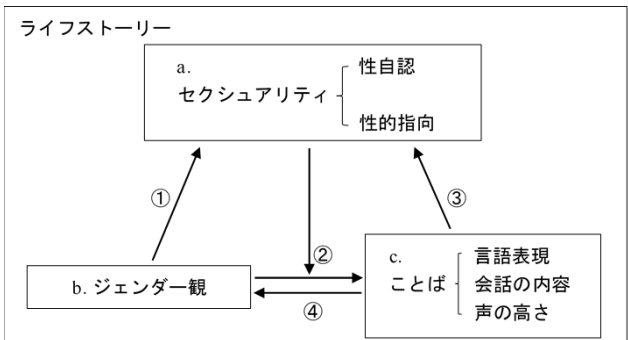


図2 セクシュアリティ及びジェンダー観とことばの関連モデル